慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ワークショップ : 共に座る
Sub Title	Workshop : sitting together
Author	Cullen, Seamus(Nakajima, Megumi) 中島, 恵
Publisher	慶應義塾大学アート・ センター
Publication year	2008
Jtitle	Booklet Vol.16, (2008.) ,p.100- 110
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	Workshop Now 3
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11893297-00000016-0100

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ワークショップ
——共に座る

シェーマス・カレン

中島　恵　訳

ワークショップ、この言葉を聞くと私はすぐに、熟練した手仕事で何かを作りだし、また何かを修理するような場所、つまり小屋や建物を考えます。さらにこの言葉には、ものを買ったりする場所、という意味合いもあるでしょう。そもそも、お店（shop）はそういう意味なのですから。要するに、ショップのありようが問題なのです。私は、まだショップというこの言葉が本来の意味で使われていた時代に生まれた人間です。ですから、頭をすこし切り替えなければなりません。つまり、ワークショップの語を学習グループやディスカッション・グループ、またセミナーといった別の語に適用するとしたら、切り替えが必要になります。とはいえ、その場合でも、ワークショップ本来の意味がそれなりに働きつづけていると期待してかまわないでしょう。

私はこれまで、人生のさまざまな時期に、いくつもの「ワークショップ」に参加してきました。そのなかでもっとも鮮明な記憶は、フィリピンの経験とインドの経験のふたつです。そこで、このふたつの経験にもとづいて、私がワークショップにとって不可欠と考える要素、あるいは逆に不必要と考える要素、そのあらましを示してみましょう。ワークショップは6ヶ月間余りの期間にわたって開催されました。この期間の長さを考えると、それらが本当のワークショップとは呼べないと異議を申し立てる方もいるかもしれません。しかし、この小論の目的のためには、けっしておかしくはありません。というのも、私がいま強調しておきたいいくつかの要素は、ここに明示されており、また、ふたつの経験が長期間にわたったからこそ、より綿密な検討にこたえてくれるからです。つまり、事態を「クローズアップ」して見ることができるからです。

まず、フィリピンの経験から検討しましょう。開催地はマニラの大学で、期間は7ヶ月間でした。セミナーの目的は、教理入門教育を行うための訓練です。言い換えれば、この「ワークショップ」の目的は、一般の方々にキリスト教を紹介し、キリスト教の理解を深めるうえで手助けとなるよう

な講座をおこなうための技術を身につけることにありました。

ワークショップ講座は通常どおり、「オリエンテーション」期間から始まります。この期間で記憶にのこるひとつは、私たち参加者が、ほかの参加者たちに覚えやすい名前で呼びあうよう勧められたことです（20以上もの国からの参加者で、その発音がほかの参加者にとってやや難しそうな名前もありました）。あれから幾年もの歳月が流れた今、私はそこにいた人々の「本当の」名前をほとんど思い出せません。このやり方は、コミュニケーションを容易にして「家族的な」雰囲気をつくりだすための方法なのでしょう。けれども私には、それが良い案だったとは思われません。「オリエンテーション」期間に関してもうひとつ覚えているのは、その間のエクササイズ全体が、それに続くセッションを私たち参加者に受け入れやすくさせるための準備を目指していたことです。言い換えればそれは、一種の洗脳のセッションで、その後で何が提示されようともそれに対して私たちを無批判にさせる、そうした目的を感じました。率直なところ、そんな印象がいつまでも私につきまとってやみませんでした。

「オリエンテーション」期間が終わるとすぐに、私たちはコースのメインパートにうつります。このパートの大部分は、きわめて多くのテーマの講義からなっていました。当然ながら講義はいずれも、キリスト教のさまざまな側面と結びついています。教会論、キリスト論、聖書論、教理教授学、秘跡論、宣教神学、聖職者論。これらはそのごく一部にすぎません。講師は世界中から集められた方々で、どなたもきちんとした興味深い講演者でした。すぐに想像されるように、講義を裏打ちする豊富な文書資料にもことかかず、会場となった大学には素晴らしい図書館が併設されていました。

私は、この施設での時間を満喫しました。けれどもこの「ショップ」で私が何を獲得したのか、それを思い出そうとすると、どうもうまくゆきません。私は、そこで得たものを、それが何であれ、どうやらすべて置き忘れてきてしまったようです。その理由をたどってみましょう。おそらく、「ワークショップ」に「ワーク［仕事／努力／行為］」の要素が無さすぎたからではないでしょうか。ほかに、きちんと努力を注ぐべきことが無かったわけではありません。この土地の気候も食事も私には馴染みがなかったわけで、環境の変化に適応するには苦労しました。その意味で、たくさんのワーク［努力］があったのです。でも、そうした「ワーク」は、「ワークショップ」の一部をなすものではありませんでした。この点を具体的に説明するために、私の第二の「ワークショップ」経験について語ることにしましょう。

こちらのワークショップは、インドで開催され、開催期間はちょうど半年間で、ほぼ同じです。このときの会場は、デリーからバスで北に12時間ほどのアシュラム（ヒンドゥー教の隠棲所）でした。辞書類の定義によれば、アシュラムとはある種の共同体、もしくは共同生活場で、そこに暮らす修行者たちは霊的な目標と実践を共有します。この「ワークショップ」では、

暮らすことと学ぶことの境界は、すっかり取り払われていました。食べること、歩くこと、働くこと［ワーキング］、話すこと、読むこと、これらを含むすべての活動が同じひとつの目的に向かっていました。その目的とはすなわち、人間にとっての現実を探究し、人間存在の深さを測り、「知的な」努力が達成をのぞむものをのりこえることなのです。けれどもこの探究、つまり人間存在の深淵にもぐりこみ、「向こう側へゆく」試みは、それについて読んだり、聴いたりしても実現できません。それは、防衛がとかれたところ、すなわち私たちが知的な追究を通じて無意識のうちに築き上げてしまう障壁や防壁を取り去り、そこにわが身をさらすこと、そうする以外には実現できません。この「ワークショップ」に含まれるワーク［行為］とは、壁を打ち壊し、それまで知られえなかった現実の次元を見つけだし、生きることそのものをあらゆる面から了解するためにまったく新たな方法をつくりだす、そうしたワークにほかなりません。これについて、もうすこし考えてみましょうか。

哲学者デカルトは、有名な命題「我思う、故に我あり」を提唱し、そのときに、自分がもっとも根本的な真理を発見したと信じました。けれども、実際のところ彼は、もっとも基本的な過ちを表現したにすぎません。つまり存在と思考を、そして自己同一性（アイデンティティ）と思考とを同等に見なしてしまったのです。強迫感に捉われて思考する人間、すなわちほとんどすべての彼／彼女が所詮、自分の手で創造した世界に生きているにすぎない事実を見落としたのです。私たちは、浅はかにも（愚かにも）思考と呼ぶ果てしないイメージの流れにしがみついているにすぎません。なぜなら、私たちの自己同一性（アイデンティティ）は、この「思考」のうちにあると思いこんでしまうからです。しかし、このワークショップで私は、自分の自己同一性（アイデンティティ）といった代物はまったく強固でないと知りました。それは、強固とは程とおい何かのうえに形成されているのです。それは、「在ること」それ自体を基盤としており、記述、定義できたりする類の何かに基づくのではありません。もはや私は、自分自身について、自分がこうであるとか、ああであるとか、語ることはできません。なぜなら、こうした記述あるいは定義は、すべて社会的起源を有し、それゆえ、たんに社会的に決定されるにすぎないからです。

私がいま語りかけているのは、もっとつきつめた事態です。私たち人間の誇りとしがちな「思考」の能力こそが、実は今日人類の直面する危機問題ほぼすべての直接の原因なのでしょう。実際、たいていの問題がまさにそうなのだという事実、私はそれを語りかけているのです。もちろんこれまでも、こうした状況はありました。けれども、現在、その状況はますます加速してやまないのです。また同時に、必要のないときには、この思考という素晴らしい道具の「スイッチを切り」、もっと基本的な気づき（aware）の方法に立ち戻る能力の必要性も認められつつあります。どなたも、数年前に起きた新潟の大震災をご存じですね。地震発生から二、三日

たって、ひとりの少年が生きて発見されたことを覚えているでしょうか。彼の母親と姉は亡くなりましたが、彼は、そうした過酷な経験にも耐えたのです。テレビのキャスターはニュースを伝え、この幼い一員が生き延びられた理由は、おそらく彼が大人のように思考する能力を持たなかったことにあるとコメントしました。たしかに私たち大人がそのもっとも偉大な財産と自負してやまないもの、すなわち思考する能力、あるいは熟考する能力を「もたない」こと、それこそが、彼を救ったのでしょう。私たちは、思考能力をもつからこそ、自分たちが他のいかなる動物にも優ると考えがちです。アシュラムでの経験は、次のことを私自身にきわめて明確に教えてくれました。すなわち、より根本的な気づきの方法、「非＝知的」な気づきの形式こそ、人間の魂が真に切望するひとつの世界への扉を開くのだ、と。つまり、私たちの自己同一性（アイデンティティ）が、他のすべての事物の基盤たる「在ること」を共有する世界、そうした世界への扉を開いてくれるのだ、と。そこは、人間が真に自分たちの場所と感じてくつろぎ、彼／彼女がもっとも良い状態でいられるところ、意識のスイッチがいったん切られた世界なのです。本当の芸術家は誰でも、自覚していようとなかろうと、無＝意識から、すなわち内なる静けさから何かを創り出します。意識が創造的な衝動や洞察に形を与えるのはそのあとのことでしかありません。偉大な科学者たちも、彼らの創造的なブレイクスルーは心の静寂さから浮かび上がってくる、そう報告しています。アインシュタインを含むアメリカのもっとも優秀な数学者を対象とし、彼らの仕事の仕方（ワーキング・メソド）の謎を解明するための全国的な調査は、驚くべき結論をもたらしました。なんと思考は、「創造行為そのものの簡潔かつ決定的な局面において、付随的な役割しか果たしえない」とのことです。

インドの「ワークショップ」の中心要素たる「ワーク［行為］」とは、まさにこの点をとらえていました。それは、いま現在のこの瞬間にふみとどまろうとする努力でした。この目的に到達するために、さまざまな技術が駆使されたのです。瞑想は、そのもっとも基本的なもの、と言ってよいでしょう。そう聞くと、どなたも、ただちにこう言われるでしょう。「ああ、なるほど、あなたは、今この瞬間という概念について思考を重ねたのですね。そしてそれがどんなに重要であるかに気づいたのでしょう。それこそ、まさに瞑想の目指すところですよ」。いや、ちがうのです。事実は、まったくそうではありませんでした。第一に、瞑想はそのような思考ではないのです。おそらく、より正確には、私たちの参加した瞑想は、むしろ座禅に近いものだった、と言えます。座禅に外的な動機があるかどうかの問題はこれまでも議論されてきました。つまり、私たちが座ることにはなんらかの「理由」があるのか、それとも座ることただそれだけのために座るのか、という問題です。だが、この論争は私の関心のかぎりではありません。私の見地からすると、私が座る理由は、今この瞬間と触れあうこと以外に何もありません。自分自身の呼吸ほど人間にとって直接的なものはないので

す。自らの呼吸に気づいてこそ、私たちははじめて自身の「在ること」に気づくようになります。この気づきを深めてこそ、私たちは自分自身の「在ること」の神秘に気づくようになります。そして、ここにいたって、あらゆる事物の相互＝関係に気づき、自分が「正常」と考える自己同一性（アイデンティティ）の不適当さに気づきます。

そのようなワークショップはあまりに個人主義的で、実際にはワークショップとは呼びがたい、と言われるかもしれません。けれども、そうした異論は有効ではありません。というのも私は、ともに瞑想しながら座る大勢の人たちが新たな力強い動勢を創り出してゆく現実を、身をもって経験したからです。そこでは、ともに「座る」（座禅する）人のあいだに結びつきが生まれました――それは他のどんな方法で創出された結びつきよりもずっと深かった――。またそれにとどまらず、ひとりひとりによって達成された気づきの次元もまた、彼／彼女個人が単独に座るときに比して、はるかに深かったのです。これは、参加する人間がきわめて深い次元で、つまり「在ること」そのものの次元で互いに関わりえたからである、と私は思っています。そして実際インドには、長いこと顔をあわせなかった者同士が互いの親交を回復するためにともに「座る」、という愛すべき習慣があります。日本やどこの国でも、しばらく会っていなかった人々が時間をかけて会話し、「キャッチアップする［互いの近況を交換しあう］」同様の習慣があることは、よく知られています。とすれば、大勢の人がひとつになって本当に良いワーク［行為］を成しとげうる以上、ワークショップという概念はまさしく有効にちがいありません。

私の参加したふたつのワークショップについてまとめるとすれば、それらがまったく異なっていたことを指摘しておきましょう。最初の例、フィリピンのワークショップでは、知的な活動に重きがおかれました。そこで通貨の役割を果たしていたのは、観念と、眼に見えるその象徴、すなわち話され書かれたものとしての言葉でした。同様のことは、講義と講読を含むいかなる形式の学問にもあてはまるでしょう。そこではつねに、言語のもつ本来的な限界が示されます。言語や観念のかげには、いつでもひとつの歴史が潜んでいます。ある言葉を書いたり話したりする人間の歴史と、それを読んだり聞いたりする人間の歴史は、まったく異なり、まじわりません。知識（知識＝合一）が重要な役割を果たすコミュニケーションにとり、こうした事態は受け入れがたいのです。どれほど定義や明確化を重ねても、象徴の曖昧さを取り払うことはできません。象徴とは、一でありながら、多を指示する形式をとるものだからです。

第二のワークショップは、それとまったく異なる力動性のうえに築かれていました。ここでの重点は完全に、経験におかれています。私たちが学んだことは、言葉ではなく、個人の経験によってもたらされました。これは、いかなる「ショップ」でも購入しえない何かに帰着する「ワーク［行為］」なのです。そして上記したように、その「ワーク」は多くの人々によ

って同時に遂行され、また、個人の「ワーク」は全体の所産におおいに貢献してやみません。このショップで身につけた何かであればこそ、それは、時を経るごとに価値を高め、時が過ぎるとともに生活のあらゆる面にますます浸透してゆくのです。

（カトリック宣教会・聖コロンバン会司祭）

*　　*　　*

Workshop：Sitting Together

Seamus CULLEN

When I hear the word workshop I immediately think of a shed or building where manual skills are exercised and something is made or repaired. And the word would also have had some connection with a place where one procured or bought something which one needed. After all, isn't that what a shop is for? I go back to a time when that is what the word originally meant. So I have to do a little adjusting in my thinking when I want to use the word with a different meaning. But if that word is going to be used for study groups and discussion groups and seminars I think I have a right to expect that there will be at least some elements of the original meaning retained. So what are these elements?

I have been to many "workshops" at various times during my life. Those that stay in my mind most clearly are the experiences I had in the Philippines and in India. So I shall dwell on these two experiences in order to outline what I think should and should not be part of a workshop. Both of these experiences lasted for six or more months and for that reason some people might think that they can not really be called workshops. But for my purposes they are admissible because the

elements I wish to stress are eminently present and, because of the length of period involved, admit of closer perusal. It makes a "close-up" view possible.

Let me look at the Philippine experience first. The venue was a University in Manila. A period of seven months had been allocated. The purpose of the seminar was to train for catechetical work. In other words the purpose of the "workshop" was to develop skills which would be used in running courses to introduce people to Christianity and to help people deepen their understanding of Christianity.

As often happens the course began with an "orientation" period. One of the things I remember about this period was that we were encouraged to use names that would be easily remembered by the other members on the course. (There were people from more than twenty different countries there and the pronunciation of some names would have been a bit difficult for some other members.) Many years have passed since that time and I can scarcely remember any of the "real" names of the people there. The idea was to cultivate a "family" atmosphere in order to facilitate communications. I don't think it was a good idea. The other thing I remember about that "orientation" period was that the whole purpose of the exercise was to get us ready to be open to what was to follow. In other words it was a sort of brain-washing session with a view to making us uncritical of whatever might be presented. Perhaps it would be more accurate to say that that is the impression that lingers with me.

When the "orientation" period finished we went straight into the main part of the course. This consisted, for the most part, of lectures on a great variety of subjects. All of them, of course, had to do with different aspects of Christianity. There were lectures on Ecclesiology, on Christology, on Sacred Scripture, on Catechetics, Sacramentology, Mission Theology and Spirituality to mention but a few of the subjects. The lecturers were from various parts of the world and they were all good and interesting. As would be expected the lectures were supplemented by copious reading material. There was a very good library in the institution.

I enjoyed the time at this institution. But I would have difficulty in remembering what I purchased at this "shop". I seemed to have mislaid whatever it was that I got there. And I would say that the reason for that is that the work element was missing from that "workshop". That does not mean to say that there wasn't plenty of hardship. The climate and the food were not what I was used to so there was hardship in adjusting

to this change. In that sense there was plenty of work. But the "work" was not part of the "workshop". To illustrate what I mean by this let me go on to my second experience of a "workshop".

This was in India and again the time span was just half a year. This time the venue was an ashram about twelve hours by bus north of Delhi. An ashram, as defined in the dictionary, is a commune or communal house whose members share spiritual goals and practices. In this "workshop" there was no divide between living and learning. Everything, including eating and walking and working and talking and reading was aimed at the same objective. The objective was to explore the human reality, to plumb the depths of one's being, to go beyond what "intellectual" effort can hope to achieve. But this exploring, this diving into the depths of the human being, this "going beyond" was done not by reading about it, not by listening to talks about it but by leaving oneself exposed to what is there when the defenses are down, when we have removed the barriers and walls we unconsciously build through intellectual pursuit. I would say that the work involved in this "workshop" was the work of knocking down walls, of discovering a dimension of reality that was hitherto unknown, of developing a whole new way of perceiving life in its every aspect. But let me be specific.

The philosopher Descartes believed that he had found the most fundamental truth when he made his famous statement "I think, therefore I am." He had, in fact given expression to the most basic error; to equate thinking with Being and identity with thinking. The compulsive thinker, which means almost everyone, is not even vaguely aware that he/she is living in a world of his/her own creation. There is a desperate clinging to the endless flow of images which we fondly (foolishly) call thinking because it is thought that one's identity is in this "thinking". In this workshop I experienced that my identity is not at all so flimsy. It is based on something far more solid. It is based on BEING itself and is not the kind of thing that can be described or defined. I can no longer say about myself that I am this or that because all of these descriptions or definitions will have social derivation and will therefore be entirely socially determined.

What I am saying is rather radical. I am saying that the ability to "think" on which we pride ourselves as human beings can be and most often is the ultimate cause of most of the problems facing human-kind today. Of course it has always been this but it is becoming ever more and more so. At the same time there is an awakening to the need for the ability to "switch off" this wonderful tool when it is not needed and to

revert to a far more fundamental way of being aware. We are all aware that there was a big earthquake in Niigata some time ago. And we are also aware that at that time a little boy was found alive after two or three days. His mother and sister had died but he was none the worse for his experience. The television newscaster announced the news and then commented that the probable reason the little fellow survived was that he did not have the ability to think like an adult. What saved him was his NOT having that thing which we adults think is our greatest asset, the ability to think and have thoughts. Because we have the ability to think we consider that we are superior to all other animals. My experience in the ashram made it quite clear to me that the more fundamental way of being aware, the "non-intellectual" form of awareness opens up a world for which the human soul is really starving, a world where one's identity is based on the same Being on which all things are based. This is the world where the human being is really at home. This is where the human being is at his/her best. It is the world where the mind has been switched off. All true artists, whether they know it or not, create from a place of no-mind, from inner stillness. The mind then gives form to the creative impulse or insight. Even the great scientists have reported that their creative breakthroughs came at a time of mental quietude. The surprising result of a nation-wide inquiry among America's most eminent mathematicians, including Einstein, to find out their working methods, was that thinking "plays only a subordinate part in the brief, decisive phase of the creative act itself"

The "work" which was the main element in the "workshop" in India was mainly this. It was the sustained effort to remain in the present moment. There were different techniques used to achieve this purpose. I would have to say that meditation was the most basic one. Now immediately you may say, "Ah, yes. You did a lot of thinking about the notion of the present moment and you discovered how important it is! Isn't that what meditation is all about!" No, that was not at all the case. First of all, meditation is not that kind of thing. Perhaps it would be more correct to say that the meditation in which we engaged was more like the zazen experience. It is controverted whether or not there is external motivation for zazen. In other words, does one have some "reason" for sitting or does one sit just for the sake of sitting. I am not concerned with that controversy. From my point of view my reason for sitting is to get in touch with the present moment. There is nothing more immediate to a person than one's own breathing. By being aware of one's breathing one is very close to an awareness of one's being. It is through the

deepening of this awareness that one becomes aware of the mystery of one's own being. It is at this point that one becomes aware also of the inter-relatedness of all things, of the inadequacy of one's "normal" identity parameters.

It might be said that this kind of workshop is too individualistic to be really called a workshop. But this objection would not be valid because in fact I experienced that many people sitting in meditation together creates a new and powerful dynamic. Not merely is there a bond created between the people who "sit" (zazen) together that is far deeper than the bond created in any other way, but the level of awareness reached by each individual is far deeper than is achieved by an individual sitting on his/her own. I think this must be because the people involved are relating at a very deep level, at the level of being itself. Indeed there is a lovely custom in India where people who have not met for a long time "sit" together in order to re-establish connection. In Japan or any other country I know there is a strong likelihood that people who have not met for a long time would spend a lot of time talking and trying to "catch up". So the concept of workshop is very valid because there is a real job of work being done by many people in unison.

So to sum up what I wish to say about the two workshops in which I took part, let me say that they were totally different. In the first one, in the Philippines, the emphasis was on intellectual activity. Here the currency was ideas and their visible symbol, the word, whether it be written or spoken. This can be said about any form of study that involves lectures and reading. There is always the inbuilt limitation of words. Behind every word or idea there is a history. The history of the person who speaks or writes the word and that of the person who hears or reads the word are entirely disparate. For the communication that knowledge (Knowledge = Union.) signifies this is not acceptable. No amount of defining and clarifying can remove the vagueness of the symbol which purports to contain the one in a form that of its nature refers to the many.

The second workshop was built on a different dynamic. Here the emphasis was entirely on experience. What one learned was not conveyed through words but through individual experience. This was the "work" which resulted in something that could not be bought in any "shop". And as I have indicated above the "work" was done by many people at the same time and the "work" of each individual very much contributed to the overall product. The something that was bought in this case is something that seems to improve with age, that flows more

and more into every aspect of life as time goes on.

(Priest of the Missionary Society of St. Columban)